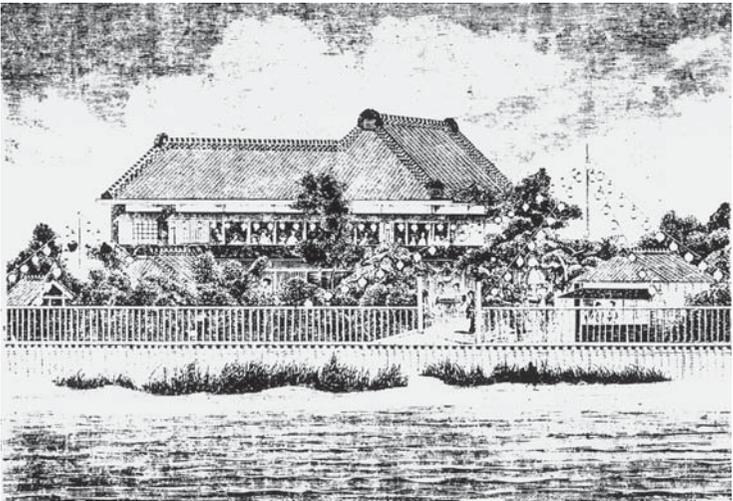


英吉利法律学校の開校式

本学の前身である英吉利法律学校が、東京府知事の設置認可を受けたのは一八八五（明治十八）年七月十一日のことである。

設置認可の願書には、同校の設置目的が「邦語ニテ英吉利法律学ヲ教授シ、其実地応用ヲ習練セシムルニアリ」と明記され、増島六一郎校長以下一六人の教員履歴が続いている。この願書には、『中央大学二十年史』で創立者とされる渋谷慥爾・渡辺安積の名前がみあたらないが、現在のところはつきりとした理由はわからない。

しかし、創立者たちのうちで、設立に最も熱心だったのが増島とその同志高橋一勝であったことは、同年九月十九日に開催された開校式の様子からもうかがえる。午後三時三十分には海軍楽隊の演奏をもって開幕した式典において、最初に高橋が同校設立の趣意を述べ、続いて増島が英語によって、同じく設立趣意を述べている。両人とも英吉利法律学校を代表して挨拶しているのである。



東京府下江東中村楼

どの名前もみえる。また、外国人としては司法省雇カークウード、米国全権公使ハッパート、英国領事ロバート

おそらく、両人にとってこの日の式典は、「一世一代の晴れ舞台」だったであろう。なぜなら、高橋は翌年に流行したコレラ病に感染して死亡し、増島もまた、八九年の大日本帝国憲法発布を契機として国内法重視の法学教育が主流を占めるようになると、同校を離れてしまうからである。

ともあれ、英吉利法律学校の開校式は盛大な式典であった。会場となった中村楼は、両国橋近くの河岸（現墨田区両国一丁目付近）に建つ、当時としては超一流の料亭であり（図版）、そこに参集した創立者・来賓・生徒の総数は二百余人とも三百余人とも報道されている。

来賓の顔ぶれをみると、玉乃世履大審院長、鶴田皓参事院司法部長、渡辺洪基東京府知事などの官僚をはじめとして、慶応義塾の福沢諭吉、専修学校の相馬永胤といった学校関係者、さらにはのちに政友会総裁として内閣を組織する犬養毅や三井財閥の基礎を築く中上川彦五郎な

ソン、代言人（弁護士の前身）ラウダー、ヘラルド紙新聞記者ブルーク、メール紙新聞記者プリンクリーなど計六人が招かれており、創立者たちの出身校である東京大学の卒業式に匹敵するほどの盛大さであった。

これら錚々たる来賓の祝辞の中で、福沢諭吉の演説は非常に含蓄深いものであった。彼はまず、英吉利法律学校創設の趣旨に賛意を表した上で、社会における人間の諸活動はすべて「法理の範囲内に在るものなれば、法律は人間生々必須の学と云うも可なり」とし、「判事となり代言人となるがために法律を学ぶと云ふ者は、未だこの学の区域を知らざる人の考えたるに過ぎず」と断言している。英吉利法律学校で「人生必須の学問」を深く学びとってほしいというのが、福沢の真意であった。

福沢の演説は、開校式から三日後の九月二十二日付『時事新報』によって一般に公表されているが、大志をいだいて英吉利法律学校に入学した青年たちは、彼の演説をどのような思いでうけとめたのであろうか。